

## 跋

武田ミキ先生の永眠は、学校法人武田学園において教育のことに従事している者たち等し並に、衝激を与えたことでありました。私自身、平成五年十二月二十七日の早朝の電話で、ミキ先生永眠の事実を耳にしてから、全ての事態が蕭々と進んでいく中であって、心の中にポカリと空白部分が出来まして、それが時間の経過とともに大きく口をあけていくような虚脱感に襲われていました。その空白部分を埋めようという衝動が、この「遺響」の企画に結び付いたのかも知れません、平成六年新春早々にミキ先生の想い出の記をとの依頼を受けられた方々は、悲しみの最中に何事ならんと驚愕され、なかには立腹された方もあったかも知れないのです。鉄は熱いうちに打てという諺もあることと、自から慰めながらの企画であり依頼であったのですが、拙速也との酷評も当然のことであつたろうと思うのです。事実、ミキ先生の学園葬当日までに完成させたいという当初の企画は、寄稿が予想外に多かったこととかあれこれの事情で不可能となり、当日は「遺響」の速成版を配布させていただいたことでした。そして梅雨どきに入つて最終校正版が何とか手元に届いたことでありました。

寄稿して下さいました皆様方に、「遺響」完成の遅延をおわび申し上げるとともに、勝手に表記などの統一のために手を加えたこと（例えば、ミキ先生のことを、それぞれの立場でさまざまに表記されてありましたのを一応、ミキ先生と統一したことなど）もあり、当方の勝手をお許し下さいますよう伏してお願ひ申し上げます。

ミキ先生の類いまれなる生き様について、その教育実践の実相について、これからあれこれと祖述されていくことではありますが、またそれが当然のことでもあるのですが、この「遺響」がそれらの礎石ともなれば望外のことと思ふことでもあります。

平成六年六月十日

横山 邦治